

える方向での検討が必要であることを、イギリスのコンプリヘンシブ・スクールを深く分析しながら述べている。

第七章は、高校生が高校教育によってどのような利益を受けて自立成長していけるのか。中等教育の歴史的経験から、過去においては、中等教育が支配的・統治能力の形成を目的として成立したのだが、敗戦後、その拡大の過程の中で、次第に、被支配者の「同志」を形成するための基礎的・人間形成的作用を含みこんで来ているという発想と経過。中等教育課程の編成原理をとらえてみるということで、デュルケムの見解を紹介し、新学習指導要領の原理的争点を、知識と行動との分離が人格の分裂につながり、学問・思想がハウ・ツー的であることが、黙って従って行く生き方につながるなどいくつかの問題点が書かれている。

最後の補章は、すべての子ども・青年に主権者としてふさわしい基礎学力を身につけさせたいという要求、誰でも支持できる要求、要求で団結し、一致点で行動するなど教職員組合運動の基本と、労働条件の改善や研究の自由など組合の任務と発展の方向について書かれている。

紙面の都合で走り書きしたが、全体として、高校教育を、目的・理念・政策との関係・私立の立場・青年期の心理的考察・高校新学習指導要領の問題点・教育課程の原理・組合運動との関係等について、総合的に検討され、80年代に向けて我々が創造すべき高校像が構造的につかめるものとして、高校教師のみならず、小・中・大の教師も一読すべき図書であると思う。不十分ですが、以上で紹介と感想に変えたい。(草土文化刊)

(関商工定 高橋 伊佐夫)

<図書紹介>

中川 鶴太郎著 “岩波科学の本” 13

『流 れ る 固 体』

本書は数年前から刊行されはじめ、この四月に全25冊が完結した、中学生向きの「岩波科学の本」の一冊である。

あとがきに「中学校の理科の教科書では、この古典物理学の五つの柱のうち、一般力学、光学、電磁気学、熱力学の四つの柱については十分の記述があるのに、変形する物体の力学、すなわち、弾性論と流体力学は全くといっていいほど教えられていないのである。わずかにフックの法則の記載があるが、これとて、力を測る仕掛けとしての記述であって、バネの材料であるゴムや鋼鉄そのものの力学物性の記述ではない。」と現状を問題にしてい

るが「技術・家庭科」に於いても事情は同じである。“製作”は強調されても、その技術学的な知識は軽視され、技術教育でこそ、基礎とされなければならない、“変形する物体の力学”など、全くといってよいほど取り扱われていない。更にあとがきで「中学生の教科目にとりあげられていようと、いまいにかかわりなく、弾性・流動性の問題は最も日常的な事実として中学生をとりまいており……」とあるが、もの、材料を直接扱う技術科においては常に問題になるところである。

そのような意味で、本書は技術教育にかかわりの深い内容のものである。では、目次を

見てみよう。

はじめに — ものの流れと変形 —

第1章 曲げた棒はなぜもどるか — 弾性の話 —

第2章 ゴムはなぜあんなに伸るか — ゴムの弾性は気体の圧力に似ている —

第3章 かきまわした水はなぜ止まるか — 粘性の話 —

第4章 おかしな流れのいろいろ — 振ると「とける」液体、「成型」できる液体、ひび割れする液体 —

第5章 流れる固体 — 氷河は流れる、岩も流れる —

第6章 弾性のある液体の話 — はねもどる液体、糸をひく液体、はい上がる液体 —

第7章 バネとピストンの仕掛け — 模型で考えるのは便利なことだ —

第8章 絹糸はどうしてできるか — カイロは糸を吐くのではなくて、引きだすのだ。クモの糸も同じ —

第9章 粘液は何のためにあるのか — 卵

の白味は黄味のゆりかご —

このように、身近な物質をとりあげ、固体、液体、気体の弾性、流れ、粘性をわかりやすく解き明していく。

身のまわりのものをとりあげているので、日常的に使われる言葉も問題にし、その不正確さと誤りを指摘して、物性の本質から、統一的にとらえる視点を示してくれる。

内容については、ヘタな紹介をするより、本書を通読される方がよいと思う。全体を通して、非常にわかりやすく、納得のいく説明をしてくれているが、ゴムやプラスチックなどの物性の説明は、本当によくわかる。また、とらえにくい流体についても、見事にその現象を解明している。

本書は、中・高生にすすめられるだけでなく、私たち教師が、まず読んで学ぶ価値のあるものと思う。子ども向けの本とあなどるのではなく、ぜひ、一読をおすすめする。

また、シリーズの他の巻も読み進めてみたいものである。

森下一期（職業訓練大学校）

佐々木享著 『高校教育の展開』

本書は、同じ著者による前著『高校教育論』（大月書店刊、1976年）の姉妹篇にあたるものである。前著が、新制高等学校発足時における高校教育の理念、原像の解明に力点がおかれていたのに対し、本書では、その後展開された高校教育政策の分析、前著ではふれられていなかった大学入試制度や、義務教育年限延長問題と高校教育との関連など、高校教育の他のいくつかの側面の解明にも筆が及ぼされ、「高校教育の原像とその発展との関連において」「現代の高校教育の若干の基本的な特徴」（「あとがき」）がとらえられ

ている。本書には、前著の後に雑誌などに発表された論文をもとにしている章も含まれているが、そのもとにした論文の表示はなく、そうした章も前に書かれた論文の単なる再録ではなく、相当な程度の書き改めがなされているようである。本書の目次の大要を以下に示しておこう。

第一部 高校教育制度の諸問題

第一章 高校教育の原像といわゆる高校三原則

第二章 高校教育の民主的性格と義務教育年限延長問題 — 背景と課題 —